魔法少女リリカルなのは　～炎の剣聖～

紅の牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　～炎の剣聖～

【Ｎコード】
Ｎ４２４３ＢＡ

【作者名】
紅の牙

【あらすじ】
この小説は魔法少女リリカルなのは～勇気の翼を持つもの～の改変版です。よろしければ読んでください。では、魔法少女リリカルなのは～炎の剣聖～始まります

プロローグ

俺は夢を見ていた、金色の髪をし、紅い瞳の少女の夢を

（何で、お前はそんなに悲しい目をしてるんだ？）

俺は聞いた。だが、少女は何も答えず、ただ黙っているだけ。そして、少女が何かを言おうとしたとき。目覚ましが鳴り、俺は目を覚ました

「・・・・・また・・この夢か。今月に入って何回目だ、この夢を見るのは？」

俺はベットから降りると、カーテンを開き、窓を開けた。開けると、風が流れてきた

「・・・・・・何かやな予感がするな」

俺がそう呟くと

「兄さん、おはよう」

弟のタカトが部屋に入ってきた

「おはよう、タカト」

「お母さんが、ご飯出来たから降りて来いって」

「解った、今行く」

タカトが下に降りると、俺は着替え、あるものをポケットに入れリビングに向かった。この日から戦いが始まるなんて、俺は思ってみなかった

第０１話

大　ｓｉｄｅ

俺がリビングに降りてくると、既に全員がそろっていた

「おはよう、大。珍しいな、お前が遅く起きるなんて」

ソファに座り、新聞を読んでいる父さんがそう言った

「俺もそう思うよ。母さん、姉ちゃん、おはよう」

「「おはよう、大」」

俺達は席に着き、

「「「「「いただきます」」」」」

朝食を食べ始めた

「・・・そう言えば、僕。不思議な夢を見たんだ」

「夢？」

食べている途中、タカトが話始めた

「うん。ある男の子が森にいてね、変な怪物と戦ったんだけど、負けちゃったんだ。って、助けを呼ぶところで目が覚めたんだ」

「へぇ～～」

「そう言えば、兄さんはどんな夢を見たの？」

タカトが聞いてきたので

「前に話した内容と同じさ」

「前にって、金髪の少女の夢か？」

俺の話を聞いて、父さんが質問した

「っそ、このごろよく見るんだよな～・・・何でだろう？」

「案外、運命の出会いの前兆じゃない？」

「まさか」

姉ちゃんに言われ、俺はあり得ないと言った

「ほら、二人とも早く食べないと、遅刻するよ」

「おっと、そうだったな」

母さんに言われ、俺は止めていた箸を再び動かした

朝食を食べ終えた、俺とタカトは家を出て、バス停に向かった。バスが来、乗り席を探していると

「タカト君、大先輩こっちです」

奥から声が聞こえた。見ると、3人の少女が手を振っていた

「おはよう、アリサちゃん、すずかちゃん、なのはちゃん」

「よう、アリサちゃん、すずかちゃん、なのはちゃん」

俺とタカトは奥に向かった

「おはようございます、大先輩、タカト君」

「おはようございます」

タカトはなのはちゃんの隣に座り、顔を少し赤くしながら話していた、よく見るとなのはちゃんもそうだった

「（青春だね～）」

俺はそれを見ながら、誰にも気づかれないように笑った。途中、頭の中に『じじくさいぞ』と聞こえたが、誰が言ったんだ？

学校に着くと、俺達は別れ、俺は自分の教室に向かった

「うぃーす」

俺が教室にはいると

「よう大、おはよう」

「っよ、タイキ」

親友のタイキが俺に話しかけてきた

「悪いんだけどよ、宿題見せてくれないか？」

「またか、少しは自分でやったらどうだ」

「やってるんだけどよ、色々と頼まれて時間が取れなくてな」

「・・・・はぁ～、お前のほっとけないは尋常じゃないからな」

俺はため息をついた

「ははははは」

俺はタイキに宿題の書かれたノートを渡し、席に着いた

そして、放課後

俺はタイキと途中まで一緒に帰り、家に帰ってきた

「ただいま」

「お帰り、大」

「父さん？珍しいね、こんな時間にいるなんて。・・・なんかあったの？」

俺は父さんに聞いた

「ちょっと、厄介ごとが起きてな。母さんと一緒に行かないといけないんだ」

「そっか」

俺は納得した。俺の家は全員が魔道師である。父さんは時空管理局と呼ばれる組織の執務管で母さんはその補佐。姉ちゃんも嘱託魔道師をしている

「暫く家を空けるが、大丈夫か？」

「まぁ、何とかなるよ」

俺は父さんにそう言った

「大、お前にこれを渡しておく」

父さんは俺に機械を渡した

「・・・これは？」

「タカトのデバイスだ。本当は俺から渡したかったんだが、そうも言ってられないからな」

「・・・・解った。俺から渡しておくよ」

「済まない。じゃあ、行ってくる」

「行ってらっしゃい」

こうして、父さんは任務に向かった。暫くするとタカト帰ってき、俺は父さんと母さんが出張で家から離れると言っておいた（タカトにはまだ魔法の事は教えていないため）

そして、その日の夜遅く、部屋でのんびりしていると

「（助けて）」

念話が届いた

「・・・今のは念話、一体誰が？」

俺が不思議に思っていると、ドアが勢いよく開き、閉まる音が聞こえた

「・・・・まさか、タカトの奴今の念話を聞き取ったのか！？」

俺は自分のデバイスと父さんから渡されたデバイスを手に取り、

急いでタカトの後を追った

「ゼロ、起きろ」

俺は走っている途中、相棒のゼロに声をかけた

『どうしたんだ、マスター？』

「厄介ごとが起きた。一気に終わらせるぞ」

『・・・了解』

「セットアップ」

俺はＢＪを纏うと、空に飛翔した

「あそこか」

俺は魔力反応が起こっている場所に近づくと、桜色の柱が上がった

「何だ！？」

『この魔力量、ＡＡＡ＋はあるぞ』

「タカト並だと！？」

目を凝らし、よく見ると、見知った顔があった

「・・・・まさか、なのはちゃんにも魔道師としての資質があったなんてな」

俺は知り合いの隠れた才能に驚いていた

『どうするんだ？』

「まずは様子見だ。危なくなったら、援護するさ」

俺はその場で止まり、なのはちゃんの戦闘を見始めた。驚いているのか、動きが良くなく、祖に隙をついて、怪物が攻撃してきた

「ゼロ」

『了解』

俺は左手の掌を怪物に向け

「トライデントリボルバー！」

高速、高威力の魔力弾を3発撃ち、怪物を撃ち抜いた。そして、誰かの助言が入り、なのはちゃんは呪文を唱え、何かを封印した

「・・・・父さん、これをタカトに渡すの結構速くなるかもしれないぜ」

俺はタカトのデバイスを見てそう呟いた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4243ba/

魔法少女リリカルなのは　～炎の剣聖～

2012年1月11日07時46分発行